

執着心重めのエリート外科医に
体を狙われて、
身籠り結婚しそうです

沖田弥子

Yako Okita

目次

執着、心重めのエリート外科医に体を狙われて、
身籠り結婚しそうです

5

書き下ろし番外編

お医者さんごっこの濃厚な受精

325

執着心重めのエリート外科医に
体を狙われて、

身籠り結婚しそうです

タタン、タタン……

規則的な電車の振動が響くたびに、心が沈んでいく。
ドア近くに佇んだ私——佐東香織は、窓硝子の向こうにある夜の闇をぼんやりと見つけた。

今日は人生で最悪な日だった。

混み合う車内で、こっそり溜息をつく。

時刻は午後七時半。この電車に乗っている人々のほとんどが仕事帰りだろう。

私だって、そうだ。毎日電車通勤をして会社に通っていた。

ただし、今日までの話だけだと——

「はあ……」

再びついた重い溜息とともに、先ほどの記憶がよみがえる。

派遣先の会社を契約満了して、退職となった。

派遣社員は、ずっと同じ会社に勤め続けることができない。派遣スタッフは同じ会社や部署で働ける期間の上限が三年と、派遣法により定められているからだ。

独身で二十九歳の私は、いつまでも派遣社員でいることに将来の不安を感じていたので、できれば正社員になりたいと願っていた。今の会社には正社員登用の制度があると聞かされていたので、それを期待して身を粉にし、働いてきた。

だけど、いつも派遣先の会社の事情で正規雇用には至らない。

更新ができない理由を上司に訊ねたところ、育児休業中の正社員が来週から復帰することが急遽決まったからだそう。

もとより私は産休の代打という立場で雇われたので、正社員が戻ってくれば用無しだ。お局様が「さっさと私に引き継ぎしてちょうだい」と叫んだ金切り声が、まだキンキンと耳奥にこびりついている。

そうして、私は引き継ぎをしたあと、本日退職したのだった。

こういったケースはこれまでもよくあったが、自分は使い捨てられる身分なのだと思うと悲しくなる。

「正社員になりたいなあ……」

小さな眩きが、規則的な車輪の音にかき消される。

電車のドアの細い窓に映る自分の顔は、ひどく疲れていた。

大きな目には陰りがあり、ルージュが剥げた唇は固く引き結ばれている。背中まである黒髪は束ねているが、艶がなく、ぱさついていた。今後また職探しの日々が始まることを考えるだけで、憂鬱になる。派遣社員を募っている企業はたくさんあるのだが、正社員となると、ブラック企業しかないのが現状だった。

アパートでひとり暮らしをしている私は、子どもの頃に両親が離婚してそれぞれ別の家庭を築いているので、頼れる人がいない。自分の食い扶持は自分で稼がなければならぬのだ。無職の期間が長いと貯金を切り崩すしかないのです、仕方なくまた派遣社員として勤務するというのを繰り返していた。

なにか特別な技能でも持っていたら、こんな惨めな目に遭わなくて済むのだろうか。でも、今さら学校に通うのは難しいだろう。そこにかかる資金や時間の余裕はない。そんなことを考えていたとき、ふと私に寄りかかってくる感触に眉をひそめる。

首を回して後ろを見ると、大柄な男性がやたらと私の背に体を押しつけていた。確かに車内は混雑しているのだが、密着するほどでもない。ほかの人たちはわずかに間隔を空けて立っている。

だが男性はぐいぐいと押してきて、しかも私のお尻に手を当てている。
えっ……まさか、痴漢……？

ぞっとしたが、落ち着いてほかの可能性も考える。偶然手が当たっているだけなのかもしれない。

だけど、仮にそうだととしても、わざわざ男性が女性である私に寄りかからなくてもよいのではないか。

疑念を抱きながら、さりげなく体を捻って避けると、男性はさらに私のお尻に手を押しつけてきた。

これはもう確定だ。彼は痴漢だ。

やめてください、と言えればいいのだけれど、怖くて声が出せない。

こんな私の言うことを、誰も聞いてくれないのではないか。身分のない私なんか、誰も守ってくれないのではないか。

恐怖と屈辱で肩が震え、臍から涙が滲み出る。

そのとき、ふっとお尻をさわっていた感触が消える。

「きみ、なにをしているんだ！」

険しい声が車内に響き渡る。

はっとして振り返ると、痴漢をした男の腕を、別の男性が掴み上げていた。

切れ上がった臍は涼やかで、すっと鼻梁の通った高い鼻。やや薄くて形のよい唇。聡明そうな目鼻立ちが端麗だ。それなのに儂げな様子はなく、雄々しさが滲んでいた。

一八〇センチを超えるだろう長身は、上質なスーツとトレンチコートで包まれている。一目見て、裕福なのだとわかる貫禄だった。

どこかで会ったような気がするけれど、誰だっただろう……

その男性から睨まれ、うろたえた痴漢は、ぼそぼそと言いつくをする。

「な、なにも……電車が揺れたから……」

「彼女にわざと密着して、体に手を押しつけていただろう。後ろからはよく見えていたぞ」
車内がざわざわして、人々がこちらに視線を向けてくる。「やだ、痴漢?」「駅員を呼べ」という声が次々と上がった。

そのとき、ちょうど電車が駅に到着したアナウンスが流れる。痴漢は渾身の力で男性の腕を振りほどき、開いたドアから転げるように逃げ出した。

「待て!」

追いかけようとする男性を、私は慌てて引き止める。

「待ってください! 追わなくていいです」

痴漢を捕まえようとして、もし彼が怪我をさせられるようなことがあってはいけない。犯罪者が、持っていたナイフで捕まえようとした人を刺すという悲しい事件を耳にしたことがある。

腕を手で制する私を、助けてくれた男性は振り返った。

「本当にいいの? 駅員に突き出して警察を呼んだほうがいいんじゃないか? 俺が付き添うよ」

「いえ、いいんです。痴漢を追いかけて、あなたが怪我をするようなことがあったらいいませんから。助けていただいて、ありがとうございます」

私は彼に深々と頭を下げた。

なんて勇氣ある人だろう。

見過ごすこともできたのに、あえて痴漢を捕まえようとしてくれるなんて、なかなかできないことだ。

顔を上げると、はつとした様子の彼はまじまじと私の顔を見つめた。

私のほうも彼が見知った人物であることに気づく。

「人違いだったら、すまない。もしかして……佐東香織さんじゃないか?」

「そうです。あなたは……堀川慶くん?」

古い記憶が呼び起こされる。

彼は高校の同級生だった、堀川くんだ。

特別に仲が良かったわけではないが、クラスメイトの彼は親切で、地味な私にもよく声をかけてくれた。

だけど卒業してからは一度も会っていない。

それなのにまさか偶然、こんなところで堀川くと再会するなんて思いもしなかった。驚いていた私は、ふと乗客から好奇の目を向けられているのに気づく。堀川くんが周囲に目をやると、乗客たちは、さっと顔を背けた。

「少し話さないか？ 次の駅でホームに降りよう」

「ええ、そうね」

ドアが開まったので、私たちはそのまま車内に残る。

腕を上げた堀川くんが手すりを掴み、私を守って囲むような体勢になる。あんな騒ぎがあったあとなので痴漢されることはもうないと思うけれど、安心できた。

すぐに電車は次の駅に到着し、私たちは人影がまばらなホームに降り立つ。

当時と変わらない笑顔で彼は笑いかけた。

「久しぶりだね。まさか佐東さんに会えるなんて、驚いたよ。会社帰りかい？」

「え、ええ……そちらも？」

私はぎこちなく頷く。退職したものの、会社帰りであることには変わらない。

すると堀川くんは私の問いを、あっさりと否定した。

「いや、俺は会社員ではないんだ。今日は医師会の会合だったから、たまたま電車に乗ったんだよ」

「医師会……お医者様なの？」

「開業医なんだ。今は外科と胃腸科のクリニックを経営してる」

私の問いに、彼は優しい笑みを浮かべて頷く。

堀川くんは学生時代から成績がよかったし、そういえば医学部への進学を希望していた。

「お医者様だなんて、すごいね」

「すごくはないよ。……ここで立ち話もなんだから、少しでも飲みに行かないか？ 霽

無気のないバーがあるんだ。案内するよ」

無職になったばかりなので、飲みに行くような精神状態ではない。

だけど助けてもらった同級生の誘いを断るのも悪い気がして、私は承諾した。

「そうね。じゃあ、少しだけなら」

微笑んだ彼は、私の背に触れるか触れないかくらいの仕草でエスコートする。

堀川くんから淑女のように扱われ、困惑した私は微笑を零した。

ふたりで駅の改札を抜ける。

この駅の周辺は高級マンションが建ち並んでいることで有名な、いわゆるベッドタウンだ。駅を出ると、薄闇に包まれた街には居酒屋やコンビニの明かりが灯っている。

「ここは堀川くんの家の最寄り駅なの？」

「うん。——俺のクリニックは、そこだよ」

堀川くんが指差した方向に目をやる。

交差点の向こうには、『ほりかわ外科・胃腸科クリニック』という看板とともに、真新しい白亜の建物があつた。

「だからこの辺には詳しいんだ。自宅マンションも近くにあって、そこに住んでる。二年前までは大学病院に勤務していたんだけど、独立したくてね。この街は環境がいいから、ここに開院を決めたんだ」

「そうなのね。自分の医院を開業するなんて、素晴らしいことだわ」

外見の印象通り、彼は成功者なのだ。

同級生という関係でもなければ、私は医師である堀川くんと飲みになんて行けるような身分ではない。こんなに素敵な人なのだから、彼には恋人か奥様がいるのだろうし、邪魔をしないよう少しだけバーで昔話をして別れよう。

そんなことを考えていると、堀川くんは瞠目する。

「優しいんだね。佐東さんは、昔のままだな」

「え？」

今の言葉のどこに、優しさが含まれていたのだろうか。私はありのままに思ったことを口にしたただけだ。

目を瞬かせていると、やがて路地に入った。バーの看板がいくつか見える中、堀川くんは一軒のバーの前で足を止めた。

「医者をやつてると、妬まれることも多くてね。『素晴らしい』なんて、誰にも言われたことないよ。大学病院を退職するときはパワハラされたな。俺が生意気だったせいかもしれないけど」

「……そうなのね」

成功者であっても、苦労は多いようだ。

他人の成功を素直に喜べない気持ちもわからなくはない。私自身が不遇の身の上だからだ。

だけど堀川くんが幸せでいてくれたことは、素直に嬉しかった。彼は私とは違う世界の人間だし、私の知らないところで彼は想像もできないような努力をしてきたのだろうから。

堀川くんは気を取り直したように明るい声を出し、店のドアを開く。

「愚痴はこのくらいにしよう。——さあ、どうぞ。この店はアヒージョが美味しいんだ」

カラン、と流麗なドアベルが鳴り響く。

海の底のような紺瑠璃に包まれた店内に入ると、「いらっしやいませ」というマスターの低い声とともに、耳心地のよいBGMが流れてくる。

こちんまりとした店内にはカウンターのほかに、壁際に並んだいくつかのテーブル席があった。奥のテーブルには男性の三人連れが座っている。時間が早いためか、ほかに客はいなかった。

トレンチコートを脱いだ堀川くんが、店の入り口近くにあるクロークのハンガーにかける。よく訪れる店だからか、慣れた様子だ。

「カウンターに座ろうか」

「ええ、そうね」

私たちは戸口に近いカウンターのスツールに、並んで腰を下ろす。

カウンターの向こうの棚には高級そうな酒瓶が並んでおり、圧倒される。

慣れたふりをしているが、私はほとんどバーを訪れたことがなかった。恋人ができたこともないし、職場を転々とする仕事柄のせいか交友関係を築きにくく、同僚と飲みに行く機会がない。もちろん、ひとりでバーで飲むなんていう勇氣も金銭も持ち合わせていない。バーに入ったことがあるのは、親戚の結婚式の二次会でくらいだ。

だからどうという注文の仕方をすればよいのかも、よくわからない。

内心で戸惑っていると、白シャツに黒のベストをまとったマスターが堀川くんを声をかけた。

「先生、いらつしやい。いつものでいいですか？」

「うん。俺はいつもので。彼女は——佐東さんはなにが飲みたい？」

そう聞かれても、飲みたいものがわからない。きつとメニューを見ても選べないだろう。私は困惑しつつも、笑みを保った。

「堀川くんのおすすめでいいわ。私、好き嫌いはないから」

「そうか。——じゃあ、彼女にはミモザを頼むよ」

マスターは「かしこまりました」とだけ言うつと、無駄のない所作で飲み物を作り始める。「堀川くんはこの店の常連なのね」

「そうだね。よくカウンターで飲んでるから、常連客にも『先生』って声をかけられるよ。仕事から離れたいからひとりで来てるんだけど、開業医になるとさうもいなくて困る」彼は端麗な顔立ちに苦笑を浮かべた。

町の医者として、近所の住民に愛されているのだろう。彼自身も困ると言いつつ、どこか嬉しそうだ。

私が顔を綻はなばせていると、「お待ちせしました」とマスターがテーブルにグラスを差し出す。

シャンパングラスに注がれた鮮やかなオレンジ色の液体が輝いている。まるで本物のミモザの花のような美しさだ。

カクテルに見惚れていると、堀川くんは琥珀色こはくいろのウイスキーが入ったロックグラスを

掲げた。

「奇跡的な再会に、乾杯」

「乾杯」

私も彼に倣い、繊細なシャンパングラスの脚を慎重に持つて掲げる。割ったりしないか心配で、彼のグラスと縁を合わせるなんてできなかった。

ひとくちミモザを口にする、甘いオレンジジュースと酸味のあるシャンパンが絶妙に絡み合った極上の美味しさが広がる。ふわりと鼻腔をくすぐる柑橘系の香りに、ほうと淡い吐息をついた。

「美味しい……。こんなに美味しい飲み物は初めて飲んだわ」

「喜んでくれてよかった。お腹が空いてるだろう？ アヒージョと、クラブハウスサンドにリブロースステーキも注文しよう」

「そ、そんなに頼んで大丈夫？」

私は心の中で会計の心配をした。

確かにお腹は空いているのだけれど、おしゃれなバーの料金は高いのではないだろうか。職を失ったばかりなので懐が心許ない。

「実は俺が腹減ってるんだよね。だから佐東さんが食べきれなくても、全部俺が平らげるから安心して」

堀川くんは片目を瞑って、茶目っ気を見せた。

無邪気な表情は昔のままだ。彼のその表情を見たら、私の心配なんて些細に思えた。

「ふふ。それなら大丈夫ね」

せっかく堀川くんに再会できたのだし、今日はお金の心配なんてしないで楽しもう。

料理の注文を済ませた堀川くんは、ロックグラスを傾ける。

目を伏せた彼の長い睫毛が美しい。

ロックグラスの水が、カランと涼しげな音を立てた瞬間、私ははっとした。思わず見惚れてしまっていた。

慌てて視線をカウンターに戻してカクテルを飲むと、堀川くんは「そういえば」と切り出す。

「同級生で誰かに会ってる？」

「ううん。最近は誰にも会ってないわ」

「鳥坂って覚えてる？ ヤンチャで有名だった鳥坂陽太郎」

「もちろん。金髪で、バイク登校していつも先生に怒られていた男子よね。先生と喧嘩して停学になったこともあったから、すごく有名なだった」

聞かれたのが共通の知り合いの話で、ほっとした。

今の私の境遇は、できれば彼に知られたくない。可哀想だと思われたら、より自分が

惨めに思えてしまうから。

そんな私の心中など知らない堀川くんは、笑顔で話を続ける。

「あいつ、今は大学病院の内科医なんだよ」

「えっ!? 鳥坂くんが医者になるなんて……意外ね」

「だろ? 大学病院の研修医になって再会したときは驚いたよ。黒髪になって落ち着いて見えたけど、ヤンチャなのはそのままだったな。教授に反発したときは、俺が冷や汗かいたよ」

「そうなのね……。みんな変わってるんだろ。同窓会に行けばよかった」

半年前に高校の同窓会の案内はもらったのだが、私は不参加だった。

未婚で派遣社員という立場ではなにと誇れることがなく、肩身が狭いのではないかと思ったのだ。仲の良かった女子もいたのだが、家庭を築いて安定している同級生を見るのもつらかった。

「そういえば佐東さんは来てなかったね。探したけどいないから、あのときはがっかりしたな」

「え? 私を探したの?」

「それはそうだよ」

笑いながら堀川くんは、テーブルに並べられたアヒージョやクラブハウスサンドの皿

を、私に取りやすい位置に調整する。

堀川くんに促されてスプーンを手にした私は、ぎこちなく言った。

「いただきます」

「どうぞ、召し上がれ」

律儀に返した堀川くんとともに、食事を進める。

口にしたアヒージョの海老は、オリブオイルとニンニクが具材に染みていて、まろやかな味わいだ。

つとこちらを向いた堀川くんは、真摯な双眸で私を見つめる。

「実は、佐東さんに憧れていたから、会いたかったんだ」

空虚な胃袋に上質な料理が注がれていくのを感じながら、彼が言ったことを反芻する。

堀川くんが、私に憧れていた――?

そんなはずはない。きっと彼の社交辞令だろう。

私は人目を引く美人ではないし、医学部に入るような頭脳もない。クラスでも目立つ存在ではなかった。

「そうなの? それは……ありがとう」

「本気にしないで。もっと仲良くなればよかったと思ってた」

思わず咳き込んでしまった。

クラスには、イケメンで頭脳明晰な堀川くん^{ずのうのいせき}に好意を抱いている女子が何人もいた。そんな彼が私と仲良くなりたかったなんて、意外だった。

少しして喉が落ち着いた私は、静かにスプーンを置く。

「そんなことないわ。堀川くんは私と仲良くならなくて、よかったと思う」

「どうしてそんなことを言うの？」

「……私は仕事がうまくいっていないから。今日、会社を退職したのよ」

話の流れで打ち明けることになってしまったが、私は努めて明るく言った。

私が無職だと知ったら、たいした人間ではないと彼はがっかりするのではないか。

だけど堀川くんは、納得いかないことを聞いたように眉をひそめる。

「俺も大病院を辞めたわけだし、離職するのは誰にでもあることだよ。でもそうか、佐東さんは今日、会社のことで大変だったんだね。しかも電車であんな目に……シヨックを受けるのは当然だ。それなのに俺は浮かれてバーに誘ったりして……迷惑だったかな」

「ううん、全然。むしろ堀川くん^{ずのうのいせき}にバーに誘ってもらえなかったら、私はひとりで泣いてたと思う。本当にありがとう」

笑みを見せると、堀川くんも安堵した表情を浮かべた。

すると彼は、今気がついたと言わんばかりの様子で訊ねる。

「ひとりで、ということとは……失礼だけど、結婚は？」

「独身よ。堀川くんは？」

「俺も独身だよ」

「えっ……そうなの？　こんなに格好いいから、もう相手がいるかと思った」

「そう言ってもらえると嬉しいけど、残念ながら誰もいないんだな」

「意外だわ……」

イケメンで、しかも医師の堀川くんが未婚だなんて信じられない。驚いた私は瞬きを繰り返す。

きっと知り合った女性は、誰もが彼に結婚してほしいと追いかけるのではないだろうか。たとえば職場で出会った看護師と交際に発展したりはしないのか。

それとも、過去に結婚した経験があるとか……

私の考えを読んだかのように、堀川くんは補足する。

「一応言うけど、バツイチだから独身というわけじゃないよ。俺は一度も結婚したことがないんだ。もちろん、子どももない」

丁寧に説明する堀川くん^{ずのうのいせき}に、つい微笑笑を零す。

私にそこまで明らかにする必要はないと思うのだけれど、誠実な彼に好感を持った。そうなると私だけ秘密にするのはフェアではないので、こちらからも言っておこう。

「私も一度も結婚歴がない独身なの。子どももないから、本当におひとりさまよ」結婚歴がないどころか、恋人すらいたことがないのだけれど、そこまで伝える必要はないと思うので伏せておく。二十九歳という年齢で恋愛経験がない上に処女というのは、もう誰にも言えなくなっていた。

「そうなんだね。それじゃあ、俺がきみに連絡先を聞いても問題ないというわけか」ジャケットからスマホを取り出した堀川くんは、わざわざ画面を傾けてこちらに見せる。

そしてメッセージアプリをタップして、登録されている連絡先一覧を表示した。

「このとおり、女性の連絡先はないから。俺が軽い男じゃないとわかってくれるかな？」自ら誠実な男性だとアピールするのがなぜかおかしくて、私はくすりと笑った。

連絡先を交換するのは社交辞令だろうから、断ると空気を壊してしまいかねない。もしかしたら、また同窓会があるときに連絡したいということかもしれないし。

私はバッグからスマホを取り出す。

「わかったわ。なにかあったら連絡してね」

画面をタップして、堀川くんとIDを交換する。

私の連絡先を登録した彼は、満足げに微笑んだ。

「ありがとう。日中はメッセージを送っても平気かな？」

「ええ。いつでも大丈夫よ。でも……堀川くんこそ忙しいんじゃない？」

私は明日から無職なので時間があるが、医師という仕事は想像以上に過酷だろう。今日も医師会があったと言っていたし、医院の診療時間だけが仕事というわけではないのだ。

スマホをジャケットの胸ポケットにしまった彼は、ロックガラスを傾ける。

「時間は作るものだから平気だよ。忙しいからといって、メッセージを送る時間すらないわけじゃないからね」

「ふふ。成功者の発言って感じね」

「それって褒めてる？」

「褒めてるわよ」

「だったら嬉しいよ。小学校の作文で花丸をもらえたときくらい」

「それ……わかるかも。すごく嬉しかったな」

共感を伝えると、屈託なく堀川くんは笑った。まるで少年のような瑞々しい笑顔に、私の心が温まる。

不意に、私が先ほど言った「成功者の発言って感じね」という言葉には、弱者の妬みが混じっていなかったかという思いが頭を掠める。

だけど彼が、さらにと笑い話に変えてくれたので、気まずくならなくてよかった。

そんなスマートな対応も、堀川くんが聡明だからこそなのだろう。

やがて、昔話をしながら料理をすべて平らげた私たちは、グラスに残った酒を口にする。ふたりのグラスを傾ける角度の深さが、もう残り時間が少ないことを表していた。グラスをコースターに下ろした堀川くんは、私に穏やかな笑みを向ける。

「もう一杯、どうかな？」

私が返事をしようとしたそのとき、カランカランとドアベルが連続して店内に鳴り響いた。

振り向くと、数名の女性たちが入店してきた。彼女たちはすでに酔っているのか、大きな声を出して話している。

背後で、カウンターにするかテーブル席にするか大声で相談している彼女たちを、堀川くんがちらりと見る。だがすぐに彼は私に視線を戻すと、小さい声で告げた。

「出ようか」

「そうね」

彼はマスターに軽く手を上げて合図を送る。

すぐに彼の前に伝票が差し出されたので、堀川くんは懷から財布を出した。私も慌ててバッグから財布を取り出す。

「おいくらかしら。割り勘でいい？」

「いや、いいよ。俺から誘ったんだから、俺が払う」

「でも、私は堀川くんの友達だし、恋人じゃないんだから奢られるわけにはいかないわ」
そう言くと、堀川くんは軽く目を見開いた。

私の価値観がおかしかっただろうか。

だけど男女でも友人なら割り勘というのが、通常通常の感覚ではないかと思う。

ふっと笑みを浮かべた堀川くんは、どこか妖艶ようえんさを漂たなわせながら口を開いた。

「じゃあ、きみは俺の恋人ってことで。だから俺の奢りだ」

呆然としているうちに、彼はカードを出して会計を済ませてしまう。

ここで無理やりお札を押しつけるのも失礼だろうと思い、私は財布をバッグにしまった。

「……ごちそうさまです」

「どういたしまして」

上品な所作でトレンチコートを羽織った堀川くんは、私の腰に軽く手を当ててドアへ促した。

堀川くんが開けてくれたドアをくぐり店を出ると、冷たい夜風が頬に吹きつける。その冷たさが、名残惜しい気持ちさをさらい、現実へと引き戻した。

堀川くんは、私に憧れていたと言ったり、恋人ということにして奢ってくれたりした

けれど、それはすべて彼の氣遣いだ。それか、昔を懐かしんで親切にしてくれただけのだろう。

彼が今の私に惹かれているのかもなんて、思い違いをしてはいけない。

そのように解釈して、私は駅へ足を向ける。

「それじゃ、ここで。今日は堀川くんに会えて嬉しかった」

「酔ってない？ 酔い覚ましに俺のマンションでコーヒードでも飲む？」

「ううん、大丈夫。そんなに酔ってないから」

「じゃあ、駅まで送らせて」

彼は頑丈な体軀を私の横につけて、守るように寄り添う。

おかげで酔っ払いなどから声をかけられることはなく、無事に駅まで辿り着いた。

心の隙間に吹き込む寂しさを振り払い、私は堀川くんに笑みを向ける。

「ボディガードしてくれて、ありがとう。堀川くんも気をつけて家まで帰ってね」

「俺は平気だよ。連絡するから。また会おう」

「またね。おやすみなさい」

互いに手を上げて、別れを告げる。

堀川くんとは今後、同窓会へ行けば会えるかもしれないが、私は参加するつもりはなかった。彼の言う「また」というのは、「いつかまた」という意味だろうと思う。

それでいい。堀川くんと私は、すでに違う世界の人間なのだから。

少しの間、昔の話ができてよかった。

改札を通って、ふと振り向くと、彼はまだそこに立っていた。こちらに向かって手を振るので、私も会釈をして応える。

視線を戻して灰色の階段を上った私は、もう振り返ることはしなかった。

電車に乗って、ひとり暮らしのアパートに帰り着く。

狭い1Kのアパートは二階建ての木造で、築三十年ほどだ。

派遣社員という不安定な立場上、都心に近くて広い物件には住めず、生活はぎりぎりだった。

部屋に入った私はいつものルーティンで、決まった場所にバッグを置く。それからジャケットを脱いでハンガーにかけ、ユニットバスのお湯を入れる。

勢いよく流れるお湯を眺めていると、部屋からメッセージの到着を伝える通知音が鳴った。

もしかして……堀川くんから？

室内に戻った私は、スマホを手にした。

画面をタップすると、そこには堀川くんからのメッセージが届いていた。

『今日は楽しかったよ。ありがとう。無事に家まで帰れたかな?』
無機質な文字の羅列なのに、酔っている私が無事に帰宅できたか確認するメッセージには、彼の思いやりが滲み出ていた。

「さっそく連絡をくれるなんて……堀川くんは律儀なのね」

彼は気を遣ってメッセージをくれたのだと思うが、ごちそうしてもらったのだから、再度礼を述べておくべきだろう。

だけど、普段男性とこういったやり取りをしないので、どのようなメッセージを送ったらよいのかわからない。

悩んだ末に、ごく簡潔な文章を作った。

『無事に帰宅しました。今日はごちそうさまでした』

送信して、そつとスマホをテーブルに置く。

まるで業務報告のようだが、やたらと浮いたメッセージを送るのもどうかと思うので、これでいいだろう。

一息ついて着替えようと考えたそのとき、またスマホが短く音を鳴らした。

見てみると、堀川くんからの返信だった。

『よかった。また飲みに行こう』

「また」——。これは社交辞令だろう。

なんらかの返事をするべきかもしれない。私はスマホを操作して『また飲みに——』とメッセージを打ったけれど、結局はそれを消した。

またなんて来ないかわかっているのに、オウム返しをするのも変だ。

迷ったけれど、私は返信をしなかった。

堀川くんからもらったメッセージをもう一度だけ眺めると、もうスマホをさわらないで寝ようと決めた。

堀川くんに再会した翌日、私はさっそく職探しを始めた。

ネットの転職サイトに登録して、そこで条件の合う企業を検索する。

だけど正社員の募集は、ほぼなかった。

あっても時給制の正社員など、実質的にはパート扱いの仕事だ。

以前、正社員登用を見込んだ時給制のパートの面接を受けたが、「正社員にしてあげるから、その代わりにふたたびで食事に行こう」などと採用担当の男性から誘われたことがあるので、できれば避けたい。もちろんその件は断ったので、不採用だった。

現状では、初めから正社員になれる道は皆無と言えた。やはり派遣社員として働いて、正社員への登用を狙うしかないのだろうか。

明日にでも派遣会社の営業にも連絡を取って、求人を紹介してもらおうか。

だけど、派遣社員になってもまた同じことの繰り返しかもしれない。迷いながらもスマホを取り出した私は、画面を見て、はっとした。メッセージアプリのアイコンに、着信ありのマークがついている。タップすると、メッセージの差出人は堀川くんだった。

『おはよう。二日酔いになってない？』

気遣いを感じる短いメッセージは、まるで親しい友人か恋人に宛てたもののよう。

医者らしく、堀川くんは私が悪酔いしていないか心配してくれているのだ。

だけど、昨夜も返事をしなかったこともあり、今さら返しづらい。もう返信しないほうがいいかもしれない。

アプリを閉じた私は、スマホをテーブルに置いた。

時計を見て、出かけるために支度をする。

昨日で退職ということにはなったが、これから残った二週間ほどの有休を消化するため、正確にはまだ離職していない。

ただ、もう仕事はしないけれど、お世話になった同僚への挨拶^{あいさつ}を含めて、お礼の品を渡したいと思っていた。

「なにがいいかな……。やっぱり、クッキーが無難かな」

お菓子を買うなら、百貨店のある街へ向かおう。

支度を整えてアパートを出ると、いつも利用している路線の電車に乗り込む。

昨日は痴漢に遭遇したが、昼間のためか車内は空いていたので、ほっとする。

だが目的の駅に到着すると、ホームは混雑していた。どうにか前を行く人に続いて階段を下りる。

そのとき、後ろから追い越してきた男性が、どんとぶつかってきた。

「きゃー！」

バランスを崩し、足を踏み外してしまう。

手すりがあったので掴めず、そのまま転んでしまった。脱げたヒールと、肩から落ちたバッグの中身が階段下に散らばる。

中年の男性はちなりとこちらを見たが、なんにも言わずに行ってしまった。

私を押したことをわかっていたはずなのに、謝罪のひとつもないなんて、なんて非情な人だろう。

ただ彼らは、私が『謝る必要のない人間』だと判断したのだ。もし私があの男性の上司だったら、彼は必死に謝罪するだろう。その前に、追い越してぶつかるという行為をしないはずだ。

多くの人間は相手の肩書きを見て、どのような態度を取るか決めている。

こんなことが度々あると、価値の低い人間という評価を受けているようで、とても悲

しい気持ちになる。

「いた……っ」

私は立ち上がると、不意に痛んだ足を押さえた。見ると、ストッキングが破れて血が滲んでいた。

階段から落ちるときに、足を切ってしまったらしい。

よろよろと階段を下りて、拾い上げたヒールを履く。バッグから投げ出されたスマホや手帳を、通りかかる人は避けて歩いていた。

誰も助けようとはしてくれない。

きつと堀川くんなら、こんなときに手助けしてくれるんだろうな……

私は腰を屈めて荷物^かを拾い集めると、バッグに押し込んだ。

惨めな思いでいっぱいだった。

眦に涙を滲ませて唇を引き結んだ私は、足を引きずりながら改札を出た。

近くのカフェまで来た私は席に着くと、血がついている左の足首にティッシュを当てた。

かなり深い切り傷だったようで、ティッシュがみるみるうちに血だらけになる。しかも小指も切れていて、血が付着していた。

昔、軽い怪我かと思いい放置していたら化膿してしまい、大変な目に遭ったことがある。最初に病院へ行ったほうがよいだろう。痛みはあるが、歩けないほどではない。

しばらくティッシュを当て続けていると、血が止まり固まってきた。

一息ついて注文したコーヒーを飲み、バッグから病院の診察券や保険証などを入れたケースを取り出す。

「ええと……足を切ったときは何科に行けばいいのかな……」

大きな怪我をした経験がないので、どこの病院で診てもらえばいいのかわからない。

診察券を持っている総合病院は、ここから行くには電車とバスを乗り継がないといけないので遠すぎる。かといって、住んでいる家の近くにあるクリニックは歯科と内科しかない。

診察券を眺めて困っていた私は、はっとした。

確か堀川くんのクリニックは、外科と胃腸科ではなかったか。

外科ならば、切り傷に適切な処置^{はじ}を施してくれるのではないだろうか。

しかもここから彼のクリニックがある街はさほど遠くない。電車で三駅くらいだ。昨夜通りかかったばかりなので、場所は把握している。

堀川くんに診てもらおう。

そう決めた私は、ふと朝見たメッセージの存在を思い出した。

返信していないのに、突然クリニックを訪ねるのは不義理かもしれない。

今の時間は診察中だろうけれど、ひとこと来院する旨を伝えておこう。

スマホを取り出した私は文章を打ち込む。

『お疲れさまです。転んで足を切ったので、今から堀川くんのクリニックを受診します。よろしくお願いします』

あくまでも患者として堀川くんに頼るので、礼節を守ったメッセージにする。

送信を終えると、私は大きく息をついた。

左足は転んだときより、さらに痛みを覚えている。すぐに診てもらったほうがいい。

私はコーヒーを飲み干すと、バッグを肩にかけてゆっくり立ち上がる。そして左足を庇^{かば}うようにして、カフェから出た。

堀川くんのクリニックには、午前の診療時間が終わる間際に到着した。

どきどきしながら院内に入り、スリッパに履き替える。

受付に保険証を差し出すと、優しいようなスタッフが「当院は初めてですか？」と訊ねてきた。

「初めてです。転んで左足を怪我しました」

「では座ってお待ちください。のちほど診察券をお作りしますね」

私は受付のすぐ傍にあるソファに、足を引きずって座る。

左足の血はもう乾いていたけれど、かなり痛みが強い。

待合室は午前の診療時間が終わる間際のせいかわりと空いていた。白い壁の室内は清潔感に溢れている。テレビから流れる天気予報をぼんやり眺めていると、すぐに名前が呼ばれた。

待合室の奥へ向かった私に、看護師が廊下に並んでいるドアのひとつを指し示す。

「こちらです。どうぞお入りください」

「はい。——失礼します」

スライドドアを開けると、診察室には白衣をまとった堀川くんが椅子に座っていた。優しいお医者様という雰囲気は滲み出っていて、信頼感が湧く。

デスクに向かっていた彼は、私の顔を見て瞠目する。

仕事中だから、メッセージは見ていなかったのかもしれない。だけど、すぐに柔らかな微笑を浮かべた。

にわかに緊張してきた私は、バッグを傍のカゴに置いて患者用の椅子に腰を下ろす。

「よろしく願います……。あの、転んで左足を怪我しました」

「は、はい。なんとか歩けるんですけど、かなり痛くて……」

今は患者と医者で、堀川くんも丁寧な言葉遣いをしているから、私もそれに倣おう。私の左足に目をやった彼は、双眸を細める。

「この怪我で歩いてくるのは大変でしたね。どういう状況で転びましたか？」

「あ……階段を踏み外しました。出先だったので、ティッシュで血を拭いただけです」男性から押されたせいで怪我をしたのだけれど、それについては伏せておく。治療には関係のないことだし、そもそも私が迂闊<ようくわん>だったから怪我をしたのだ。

「ひとまず消毒しましょう。そのベッドに仰向けになってください」

室内にある診察台に促されたので、そちらに移るべく立ち上がる。

看護師から「ストッキングを脱いでくださいね」と指示され、カーテンを閉められた。血のついたストッキングは破れているので、もう捨てるしかない。私は傷に触れないよう慎重にストッキングを足から外す。

びり、と血が剥がれる嫌な感触に顔をしかめつつ、診察台に寝そべった。

看護師から「用意できましたか？」と声をかけられたので「はい」と返事をする。

カーテンが開かれると、堀川くんが仰向けの私を見下ろす。

なんだか緊張してしまい、ごくりと唾を呑み込む。

彼は足首の患部に目を向けると、ツールワゴンからアルコール消毒布を取り出した。丁寧に患部の血が拭き取られていく。

仰向けの状態なので足元はよく見えないけれど、堀川くんは真剣な目をしていた。

使用した消毒布をツールワゴンに戻すと、彼は足首にそっと触れる。

「これは痛いですか？」

「いいえ。痛くありません」

「これは？」

「痛くないです」

傷口ではないところを優しく押される。足首や足の甲をさわられても痛みは感じない。ただ、傷口は焼かれたかのような激しい痛みがあった。

不安になった私は心情を吐露する。

「あの……傷は縫わないといけないんでしょうか？」

「縫わなくても大丈夫です。治るまで患部にガーゼを当てておいてください」

再びツールワゴンに手を伸ばした堀川くんは、丁寧な所作で傷口をガーゼで覆うと、包帯で巻く。

「もう起きても大丈夫ですよ。ゆっくりでいいので」

優しい笑みを向けられて、安堵が胸に広がる。

診察台から下りた私がしっかりと立ったのを確認した堀川くんは、「こちらへどうぞ」と椅子へ促す。

腰を下ろして向き合うと、彼は柔らかな笑みを浮かべながら説明した。

「出血したから驚いたと思うけど、そんなに傷は深くないので、いずれ塞がります。入浴は問題ありませんが、念のため激しい運動は避けてください」

「はい。ありがとうございます」

思ったより傷は浅かったようだ。手術が必要などということにはならず済んでよかった。

ほっとした私は礼を言うと、椅子から立ち上がる。

堀川くんは仕事なので、余計な話はせずに診察室を出よう。

そう思い、スライドドアを閉める間際、カルテを書き込んでいる彼が顔を上げてこちらを見る。

彼は私にだけわかるように、微笑みを向けた。それに会釈で返し、そっとドアを閉じる。処置をしてもらったおかげか、足の痛みが先ほどより和らいだ気がする。

待合室に戻ると、受付で会計を済ませる。

今日はこのまま帰宅して、足を休めよう。

クリニックを出た私は電車に乗り、最寄り駅まで帰ってきた。

ふと、食材がなかったことに気づき、スーパーへ寄る。自炊をしているので、カットキャベツやもやしなどを購入する。

だけど歩き回ったせいとか、スーパ―を出る頃には痛みを強く感じるようになった。治るまでは安静にしていけないといけないということか。

どうにか坂を上り、アパートに帰宅する。

荷物を置いて一息ついたそのとき、スマホが短い音を鳴らす。

確認すると、堀川くんからメッセージの返信があった。

『メッセージをもらっていたのに気づかなくてごめん。左足首の傷はどうか？ もし痛みが強くなった場合は遠慮なく俺に言ってほしい』

休憩時間に入ったので、メッセージを返してくれたようだ。

堀川くんに診てもらえたことで安心できた。それに、同級生だからという理由でフォローしてもらえるなんてありがたいことだ。

私はさっそくメッセージを返す。

『少し痛いけど、大丈夫です。診察してくれてありがとう』

朝は返信するのをためらっていたけれど、足の怪我のことがあるし、先ほど顔を合わせたばかりなので返事がしやすかった。

送信すると、すぐに返信が届く。

『どういたしまして。また怪我の経過を訊ねるから、きちんと報告するように。佐東さんは俺の患者だからね』

メッセージには、スタンプが添えられていた。柴犬が奇妙なポーズを取っているスタンプに、思わず笑みが零れる。

『わかりました。先生』

メッセージを送信した私は、こちらからもスタンプを送った。

うさぎのキャラクターに『了解』という文字が添えられているものだ。

私の心が、ほっこりと温まる。

怪我をしたときは、この世の不幸をすべて背負ったかのような絶望を感じたけれど、堀川くんのおかげで持ち直すことができた。

彼にこれ以上の負担をかけないためにも、しばらくは家で静養しよう。怪我が治ったら、就職活動を再開しよう。

堀川くんが送ってくれた柴犬のスタンプを見つめながら、私はそう考えた。

翌日からは大人しく過ごすことに努めた。

部屋の中で読書したり、映画を観たりしてゆっくり過ごす。

ただ、数日そうしていると、就職活動をしていないことへの焦りが湧いてくる。

だけど無理をして歩いて怪我が悪化したらいけないので、スマホで条件に合う求人を探すことに専念した。

求人はたくさんあるのだが、希望している正社員の案件は見つからない。もしあっても、怪我が治らないうちは面接へ行きづらいので、今は動きようがなかった。

「ふう……お茶でも飲もうかな」

目が疲れてきたのでスマホをテーブルに置きかけたとき、ピロン、と音が鳴った。

堀川くんからだ。

『足の経過はどうか。今はなにしてたの？ 俺は休みなんだけど、これからブランチだよ』

ウーパールーパーがナイフとフォークを掲げているスタンプを見た私は、頬を緩ませる。

いつもは格好いい堀川くんなのに、こんなキモカワイイ系のスタンプを使うなんて思わず笑ってしまう。

あれから彼は毎日メッセージを送ってくれた。最初は申し訳なく思っていたけれど、今では返信するのが楽しみになっている。

医者として経過を訊ねるついでに、雑談も振ってくれるのだ。

「足の痛みはだいぶ引きました。今は求人案件を見ていたところです。もちろん先生の指示どおり、家にいます……。これでいいかな」

私は内容を確認してからメッセージを送信する。

今日は木曜日なので、クリニックは休診日だ。堀川くんは休日になにをして過ごさるうか。質問すれば答えてくれるだろうけれど、休みなのに煩わせるのは悪い。

スマホを置いて、お茶を淹れようとキッチンに立つ。

すると、さっそくメッセージの通知音が鳴った。

堀川くんからの返信だ。なんだろうと思い、私はカップを置いてタップする。

『そういうば、佐東さんのお勧めの本を貸してくれるんだよね？ 今から訪ねてもいいかな？』

目を瞬かせた私はメッセージをもう一度読み返した。

先日、読書をして過ごしているというやり取りがあったのだが、そのとき私の読んでいる本を彼に貸すと約束したのだ。

とはいえ、いずれ機会があればという社交辞令で、まさか本当に彼が借りるつもりでいるとは思わなかった。

「え……今から？ いいけど、堀川くん、これから私のアパートに来るつもりなのか……」

とはいえ、本を貸すと約束したからには反故にすることはできない。私は『もちろん OK』というスタンプとともに、アパートの住所を送った。

堀川くんに住所を知られても問題ない。それに本を貸すだけなので、彼が部屋に上

ることはないだろう。もしアパートまで来るのが大変なら、最寄り駅で待ち合わせてもいい。

彼からの返事を待ちながら、私は本棚から一冊の本を取り出す。

タイトルは『やしゃのはなよめ』という。

とある村の娘が、夜叉という鬼の花嫁になる物語だ。生贄として差し出される娘の運命は過酷なものだったけれど、鬼に優しくされて心を開いていく過程について引き込まれる。さらにラストが衝撃的なので、何度も読み返してしまう。小学生のときに読んで以来、捨てられなくて今も本棚にある児童書だ。

キッチンに置いたままだったカップを持ってきてから座卓の前に腰を下ろし、ページを捲る。

つい読みふけていると、ピンポンと呼び鈴が鳴った。

誰だろう。隣に住んでいる大家さんだろうか。

私は本を閉じて腰を上げた。

部屋を出るとすぐにキッチンがあり、その隣が玄関のドアだ。インターホンがないので、私はドアに向かって声をかける。

「どなたですか？」

「俺だよ。堀川慶」

「えっ……」

驚いた私は目を見開く。本に集中しているうちに、かなりの時間が経過していたようだ。まさかアパートを直接訪れるとは思わなかった。

すぐにドアを開けると、そこには爽やかな笑みを浮かべた堀川くんが立っていた。

「やあ。お待たせ」

彼のまとったブルーのシャツが陽射しを浴びて、煌めいている。オフのためか、長めの前髪を下ろしているので仕事のときは雰囲気異なり、艶めいていた。

彼の優美さに動揺した私は、ただどしく言葉を紡ぐ。

「あ……いらっしやい。本を貸すって約束だったわね。今、持ってくるから」

踵を返して、私はすぐに座卓から本を持つてくる。

せっかく来てくれたのだからお茶でも出すべきなのかもしれないが、狭い部屋なので、あまり気が進まない。

幸いというべきか、堀川くんは不躰に部屋に上がることはせず、戸口で待っている。私は手にした本を彼に差し出した。

「はい、どうぞ」

堀川くんは本を受け取ると、柔和な笑みを浮かべる。

「ありがとう。読み終わったあとに感想を言い合いたいな。よかったら、これから俺の

家に来ないか？ ちょうどアランプールっていう店の、頂き物のケーキがあるんだ。俺ひとりじゃ食べきれないから、よかったら佐東さんも一緒に手伝ってもらえると嬉しいな」

アランプールは、美味しいと評判の有名な菓子店だ。いつも店舗には行列ができていて、値段も高価なので買ったことはないけれど、ずっと食べてみたかった。

見た目も華やかなケーキを思い浮かべた私は、ごくんと唾を呑み込む。

堀川くんは言葉を継ぐ。

「もちろん車で送迎するから、安心して。佐東さんは足を怪我しているんだからね」

「ありがとう。それじゃあ、お邪魔するわね」

彼の家を訪問するのであれば、出かける支度をしないといけない。

車に乗せてくれるのなら、軽装でいいだろう。室内に戻った私は部屋着にカーディガンを羽織り、スマホを入れたバッグを肩にかける。

靴を履いて戸締まりを済ませると、彼は suit と私の手を掬い上げる。

「俺に掴まって。車はすぐそこに停めてあるけど、歩けるかな」

「大丈夫よ。少しの距離なら問題なく歩けるわ」

「だけど大事にしないといけないよ。痛みを感じたらすぐに言ってくれ。おんぶするからね」

過保護な彼に微苦笑で返す。

私は堀川くんの患者なので、医師として責任を感じているのだろう。手を取られたままアパートの廊下をゆつくりと歩く。ふと目を向けると、道路に面したところにある駐車スペースに高級車が停められていた。

純白の高級車は、狭いスペースからはみ出すほど車体が長い。まるで要人が乗るようなハイブランドの車種だ。もしかしてこれが堀川くんの車なのだろうか。

目を丸くしている私の前で、彼は助手席のドアを開ける。

「さあ、どうぞ」

「ありがとう……。すごい車なのね」

「体が資本だからね。もし事故に遭っても最小限の怪我で済むよう、頑丈な車に乗ってるんだ」

そう言って、彼は私が身を屈めてシートに座るまで、手をつないで支えてくれた。

堀川くんは助手席のドアを閉めると、運転席に座りギアを入れる。

車はゆつくり走り出すと、大通りに出て、快晴の空の下を走る。堀川くんの運転は安定感があり、落ち着いて乗っていられた。

ふと、この座席には本来別の人物が座るべきなのではないかと思いついた私は、彼に訊ねる。

「休日なのに、私に時間を使っても大丈夫？ 恋人に怒られない？」

前方を見据えていた彼は苦笑すると、口を開く。

「恋人なんていないよ。助手席に乗せたのは佐東さんだから、安心して」

悠々と述べる堀川くんの言葉に、目を瞬かせる。

独身だとはバーで聞いていたけれど、まさか恋人もいないとは予想外だった。こんなに格好よくて、仕事がお医者様だったら、数多の女性から付き合ってほしいと言われるのではないだろうか。

「意外ね……。堀川くんはモテそうなのに。告白されないの？」

「されないよ。クリニクのスタッフはみんな既婚だし、家と職場の往復だけだから出会いが無いしね。そういえば、佐東さんは恋人はいるの？」

「……いないわ。いたら堀川くんとメッセージのやり取りなんてできないし、あなたの車に乗れないわよ」

私は独身どころか恋人さえいない。知り合いから男性を紹介してもらったことはあるが、メッセージのやり取りを何度かしただけで音信不通になった。その人は私が派遣社員ということに氣にしていたので、おそらく仕事に不安定だから交際相手として考えられないと判断したのだろう。私としても、彼を好きになれなかったの、付き合いたたいとは思えなかった。

お付き合いや結婚をするにはまず仕事を安定させないと始まらないのだと、私はその経験で胸に刻んだのだった。

そう過去を振り返っていると、堀川くんは嬉しそうな顔をして呟いた。

「そうか。よかった」

なにがよかったのかわからないが、ひとまず私は頷く。誰にも気を遣わなくていいからという意味かもしれない。

やがて車は、豪勢なマンションが建ち並ぶ高級住宅地へやってきた。都心の駅近という立地で、このような高級マンションに住めるのは一部のエリートのみだろう。

その中のひとつの、瀟洒なマンションを、堀川くんは指し示す。

「ここだよ」

車は地下駐車場に滑り込んだ。そこには、ずらりと高級車ばかりが並んでいる。

所定の位置に車を停めた堀川くんは、「ちょっと待ってね」と言って車を降した。

なにをするのだろうと思っていると、彼は助手席側に回り込んで、ドアを開ける。

「俺の手を取って。きみは怪我人なんだから、丁寧に扱わないとね」

差し出された大きな手のひらを前に、私は苦笑いした。

確かに怪我人ではあるけれど、介助がないと歩けないほどではない。

「堀川くんったら、過保護すぎるわ。ひとりで歩けるわよ」

立ち読みサンプル はここまで

「いや、油断はいけない。きみが俺の手を取るまで、俺は引かないから」

彼に冗談を言っている様子はない。

真摯な双眸を向けられて、ついどきっとしてしまふ。

「わかったわ。先生の指示には従わないといけないものね」

「そうだよ。ゆっくりでいいからね」

観念した私は、彼の手のひらにそっと手を重ねる。

大きな手がしっかりと私の手を握りしめると、彼のもう片方の手がドアの上部に触れる。私が降りる際に頭をぶつけないようにと配慮してくれているのだ。

無事に車から降りると、彼は私の腰に触れるか触れないかくらいの距離で手を添えながら、エレベーターへ向かう。

丁寧なエスコートになんだか恥ずかしくなり、顔が熱くなる。

エレベーターに乗り込むと、堀川くんは最上階のボタンを押した。

到着したエレベーターから降りると、そこは別世界だった。餡色の壁と黒鳶色のカーペットでまとめられた廊下は落ち着きがあり、まるで高級ホテルのようだ。

最上階は一戸しかないらしく、家には門がついている。

堀川くんは蔓模様の門を開けると、玄関ドアのボタン部分にカードキーをかざした。

カチリと音がしたあと、彼は銀色のドアノブを引く。